

映画鑑賞を用いた過去の青年期像への共感的理解の試み

—— 映画『コクリコ坂から』を題材とした大学院授業の実践から ——

今 田 雄 三

(キーワード：映画，青年期，共感，臨床心理士養成，授業実践)

1. はじめに

筆者は主に臨床心理士を目指す大学院生を対象として、学校現場での子どもの心の健康についての知識と対応を学ぶための授業「学校精神保健学研究」を担当し、例年その中で、「現代社会と子どものこころの変化」をテーマとして取り上げている。その内容として、たとえば滝川（2002）を参考に、最近の少子化傾向との関連で、終戦直後から高度成長期にかけては現在より子どもの数が多かったことや、三世代同居から核家族へと家族モデル像が変わっていったことが、現代の子どもや家族の心理にどのような景況を及ぼしているかなどを取り上げている。あるいは「現代社会と子どものこころの変化」についてのレポートを課す、ということも行ってきた。

ところが最近になって、「『最近の子どもの変化について』と言われても、自分は昔のことを知らないのでよくわからない」という若い受講者からの反応が次第に増えてきている。考えてみれば、これは当然の反応かもしれない。現職教員や社会人経験者など、ある年代以上の受講生であれば、「昔の社会」とか「昔の子ども」というものに対して、自分自身の体験に基づいたイメージを有しているため、それとの比較において「現代社会」や「現代の子ども」の変化について感じたり、考えたりという課題に無理なく取り組むことが出来る。それに対して、受講生の多くを占めるストレートマスターである大学院生は、物心ついた時から、自分自身がまさに「現代に生きる子ども」そのものであって、自分たちを取り巻く社会環境や価値観、人間関係の傾向などを初期設定として入力され、その中で日々何事かを経験し、それについて感じ、考えながら生きてきている。そんなストレートマスターたちが「現代の子どもの変化」について論じようとするならば、「自分は昔のことを知らない」のだから、まず比較の対象としての「かつての社会や子ども」のことについて具体的に調べ、知識を得ることが必要となる。この段階については、現代においては「ネット検索」という便利な手段を用いることで、指定した任意の時代の子どもの様子についての情報を収集することは比較的容易である。しかし単なる知識の集積だけで課題は達成されない。その次の段階として、そうしたデータの断片を手がかりとして、「昔の子どもとはこのように感じ、遊び、生きていたのだ」という、生き生きとした「昔の子ども像」を自分の心の中に構築するという作業に取り組み、それと「現代の子ども像」とを比較した時自分の中にどのような印象、どのような感情が動くのかといったレベルの体験を経た上で、なおかつ冷静な自己観察を伴って課題について見解を述べて欲しいという期待を筆者は持っているのだが、こうした期待は要求水準がかなり高いのであろうか。現実には受講生の多くはそうした過程を経ることなしに、誰かがネット上に掲載していた「昔の子ども像」に関するコメントをいくつか copy and paste し、それらを紹介して終わり、ということで済ませてしまいがちである。

そこで、若い世代の受講者に対し「最近の子どもの変化について論じよ」という課題に取り組んでもらう場合には、いきなり受講生自身で過去の子どものに関する情報を収集させるのではなくて、教員の側からある一定の題材を提供することで、受講生の興味を喚起し、単に知的な面に留まらず、自らの感情の動きにも印象を向け、そこから「現代の子ども」について改めて感じ、考えるという方法を取るべきではないかという発想に筆者は思い至った。だが、その際にどのような題材が適当なのかをよく吟味する必要があるだろう。

そこで注目したいのが、河合（2007）による、以下のような心理療法と芸術との意外な関連性についての指摘である。「われわれは心理療法家として、人間が生きていることに関係するすべてのことに関心をもたねばならないし、そこから学ばなければならないと思っています。いろいろ学ぶなかで、自分の仕事との関連で非常に深いものを感じるのが『芸術』です」「個人、一人の人間というものが、いちばん見事に表現されているのが芸術だと思いました。芸術は、自分の個性を土台にしなければ成り立ちません。（中略）カウンセリングも、一人ひとり違う人が、一人ひとり違うカウンセラーに出会う。クライアントも世界に一人しかいない。私も世界に一人

しかない。そういう人間同士が会おうわけです。考えてみると、そういう点でわれわれの仕事は芸術にとっても似ていると思います」(河合, 2007)。つまり筆者の考える、受け手の興味を喚起し、単に知的な面に留まらず、自らの感情の動きにも印象を向け、そこから何かについて改めて感じ考えるという取り組みに何らかの芸術作品を取り上げるのはまさにうってつけではないかということである。この河合の発言を導きの糸として、次項ではまず芸術と心理療法の共通性や、心理療法家が芸術に接することの意義について確かめていくことにしたい。

2. 芸術の持つ力をセラピスト養成にいかにかすか

(1) 共感を訓練する体験として～河合の児童文学と演劇への言及から～

河合(1985)は、ある講演の中で共感することの大切さを強調し、有名なロジャーズのカウンセリングの三つの条件のうち、「無条件な積極的関心」と「自己一致」という、一見矛盾しているように思われる要素を結びつけている非常に重要な要素こそが「共感」であり、「カウンセラーは共感さえできればいい」とまで言い切っている。ただし、それに続けて「ところが、共感するということは、ものすごく難しいことです。言うならば、カウンセラーというのは、ひたすら共感する訓練をしているんじゃないか、とさえ私は思います」とも指摘し、共感するための訓練が臨床家にとっていかに大切なのかを力説している。また河合がカウンセラーに対して児童文学を読むことを勧めているのはよく知られているが、その理由については以下のように語っている。「カウンセラーとして非常に大切なことは、クライアントの人に共感できるということです。これは、皆さん講義でよく聞いておられると思いますが、頭でわかるんじゃないで、感情を共にする、その人の気持ちが腹の底でわかると思いますか、一緒に感じるという、これが非常に大事です。そういう意味では、文学作品というのは、われわれに非常に共感をさせてくれます。読んでうちに、涙が出てきたり、体がムズムズしてきたり、冷や汗が出てきたりとか。そういうことを皆さんも味わわれたと思いますが、全然そんなことを味わったことがないという人は、もうカウンセラーにならない方がいいんじゃないでしょうか(笑)。やはり文学作品を読んで、そしてそこでわれわれの感情が動くということと、クライアントのお話を聞いてわれわれの感情が動くということとは同じことなんです。そこはしかし、文学作品というのは非常にすばらしくって、具体的に生き生きと書いてありますからわかりやすい。(中略)皆さんがカウンセリングをするためには、心理学の本を読んで骨組みがわかると同時に、生き生きと具体的な姿というのをわかる必要があります。そういう意味で、ぜひ本を読んでいただきたい」(河合, 1995)。要するに、児童文学に触れることは、教科書的な知識の習得だけでは得られない、臨床家の基本姿勢である共感が磨かれる体験となり得るという実感に基づいて、河合は熱心に児童文学を勧めているのである。

また河合はカウンセラーの共感とは、役者の「役づくり」と似ているところがあるという興味深い指摘も行っている。「役者の人が一つの役を与えられて、それになりきるのに役づくりという、あれだけの苦労を重ねるように、僕は僕の前に座ったクライアントの人生ということを共感しようと思ったら、どれだけ大変なことなのかということです。それを安易に考え過ぎて、(中略)学校に行っていない子に『学校行ってない。苦しいですか、苦しいでしょう』とか言って、おれは共感したなんて思ってますけど、本当は大間違いで、高等学校三年生なら三年生が、学校に行けずに家にいるという、その心をわれわれはどこまで共感できるか。それは言うならば、私が高中生を劇で演じて、みんなが、なるほどと感心してくれるような迫真性のある演技ができるほどに分かっているか、というふうに考えます」(河合, 1985)。ここで河合が指摘しているのは、共感とはセラピストのクライアントに対する精緻な観察力と、観察に基づいてセラピストの心の中にクライアントの心の有り様をまざまざと再現可能なレベルの想像力が要求される、多大な労力と困難を伴う行為であり、それは俳優が役づくりのためにたゆまぬ努力を行う姿勢にも相通じるものがあるということだと思われる。

このように、本項で紹介した児童文学と演劇についての河合の言葉からは、芸術に触れることがカウンセラーとしての共感を訓練する上で、大変意義深い体験となることを伺い知ることが出来る。

(2) 根底にある人間共通の『X』と呼応する体験として～河合の音楽への言及から～

また河合は、作品を通じた共感の体験とはまた異なった次元の、芸術の持つ深い意義についても語っている。河合(2007)は、芸術の根本には「人間共通の『X』としかいいようのないもの」があるのではないかといい、その説明として、「ワグナーはあのような大歌劇をつくっているのですが、ああいうものすごい歌劇によってワグナーが伝えたいと思っていることの根本、本当に言いたいことは、ワグナー自身にもわからなかったのではないか」「ワグナーのいちばん底にあるものは、ドイツもアメリカもイタリアも日本もない、人間共通の『X』なんだ」「日本に生まれ、日本に育ち、日本語をしゃべって生きてきた人間がやるのだから、ワグナーの書いたも

のをどう表現するかと言うよりも、そのもう一つ底にあるところへ、自分は自分なりにどうしたら迫れるだろうかと考える」ことにより本場ドイツで高く評価されるようになった歌手の藤村美穂子の体験を紹介し、「音楽をやっている人たちの話を聴いていますと、みんなの前で何とかそれを表現しようとしておられる。だから、われわれが聴いてもすごく感動するわけです。それはわれわれの『X』－私も『X』をもっていますから－を生きよう、というのと呼応するからかもしれません。クライアントもみんなそれを持っています。誰しも、みんな心の中に『X』をもっているのです。それを本気で生きようと思うと、音楽を聴いているだけですごい体験ができる、と私は思いました」「芝居や映画を見たり、音楽を聴いたり、文学を読んだりする。体験そのものを生きた人間としなくてもそれと同じくらいのことができるということが、芸術の素晴らしいところです。そういう意味で、私は芸術というのは本当にすごいと思います」と述べ、芸術の持つこうした側面の意義を伝えている。

ここで河合が『X』と呼んでいるものは、おそらくユング心理学で言う普遍的無意識の領域から発する心的エネルギーのことである。それは人間に生きる活力や生きる意味を与えるような強い生命力を持つとともに、あまりに根源的で力に満ちているために制御困難で、個人や社会の秩序、通念といったものから逸脱し、根こそぎ破壊しかねないデモニッシュな側面を持ち合わせている。河合（2007）によれば、こうした『X』の危険を避けるため昔は身分制度や厳格なしきたりで生活が縛られていた。あるいは今日でも我々は普段の日常生活で型にはまった生き方で過ごしている。だがこうした生活を続けていると、『X』とのつながりを失った人間はだんだん心がさびれてきて、自分が何のために生きているのかがわからなくなってしまう。そのため昔は祭りの時には制限を取り払い、日常を全部取り払って、『X』というものが中から吹き出してくるような体験をし、『X』とのつながりを回復する仕組みが社会の中で機能していた。しかし現代社会において祭りは形骸化し「本当の祭り」としての力を失ってしまっており、むしろ芸術が祭りの機能を果たしていることを以下のように指摘している。

「現代のわれわれは、そういう祭りなしで生きているのかと思ったとき、NHK交響楽団の演奏を聴く機会がありました。曲目が『ローマの祭り』でして、それを聴いて私は『祭りはある』と思いました。私の心は、演奏を聴いている間じゅう、完全に祭りになっていました。すごい祭りが心の中で躍動する。オーケストラの演奏が心の中で生き生きとした祭りを喚起するのです」「現代にも祭りはちゃんとある、芸術の中にあると思いました。演劇の中にもありますし、映画の中にもありますし、そういうところで自分の心の祭りを体験するというのは、とても大事なことです。一度、自分の『X』をガチャガチャと振り戻して、勢いよくつくり直すぐらいの祭りを体験するのです。（中略）いまの時代は、芸術によって祭りを体感できる。体感できるというか、はじけることができる。これが大事なのです。『今日の演奏はよかったですね』とか、『この絵はちょっとおもしろいですな』ではだめなのです。やはり、その作家が言わんとしているものが、こちらの心の中で生き生きと呼び起こされないとだめです。それが芸術というものだと思います」（河合、2007）と語っている。

このように、河合が前項で指摘した「共感を磨く」というのはまた別の、現代における芸術の意義として、作者の表現の根底にある人間共通の『X』と出会い、呼応することによって自分の心を躍動させ、自分の何かが作り替えられるような体験が呼び起こされ、自分が生きているという実感を取り戻す、といった作用の重要性に我々は大いに目を向けなくてはならないだろう。その際、特に上記の引用の最後で河合が述べているように、単に表面的に作品を眺めているだけではだめなのであって、作品を通して、作者が表現したかったことが、受け手である我々の心の中にありありと喚起するような姿勢でコミットしていかなければ、こうしたレベルの体験をすることはおぼつかないということを忘れてはならないだろう。

(3) 題材の選択～河合、山中、前田による映画への言及から～

ここまで、河合による児童文学、演劇、音楽などいくつかの芸術領域への言及を通して、臨床家の養成に関して芸術からどのような効果が期待できるかについて述べてきた。本項では実際にどのような表現メディアを用いた授業実践を行うかを具体的に考えてみたい。それに当たって、実は前項で引用した河合（2007）の発言「……それが芸術というものだと思います」の後に続けて、「『そう言っても、なかなか難しいし……』と思う人には、映画を勧めたいと思います。映画はわかりやすいです」と河合が述べていることに注目し、映画を題材とすることの是非を中心に本項での検討を進めてみたい。映画というメディアは「絵が動く」「写真が動く」という多分に見世物的な興味を大衆に提供するところから出発しながら、次第に芸術性・作家性に富んだ作品が提供されるようになり、今日でも芸術性と娯楽性を併せ持つ表現媒体としての生命力をよく保っている。また、映画を観て登場人物に共感を覚えたり、映画の表現から河合の言うところの『X』に触れることで心を揺さぶられるという経験が十分に起こり得ることは、我々も体験的に十分理解できるのではないだろうか。そして河合のいう「わかりやすい」ということは映画の持つ大きなメリットであると認められるだろう。さらに以下では映画と、

先に挙げた他の芸術の表現手段との間で比較を行っていくことにする。

1) 児童文学との比較

まず、児童文学と比較した場合はどうか。今回の筆者の狙いは「具体的にある年代を舞台にした作品を選んで、それを通して『昔の子ども像』を若い受講生の中に喚起すること」であるが、果たして活字メディアである児童文学はこの狙いにとって最適なのかを吟味したい。山中（2002）は世界的な大ベストセラーとなり、映画化もされた『ハリー・ポッター』シリーズについての言及の中で、「活字と映像では、良さが別々だということです。完全に時空間を共有できるというのが、映像の良さ。それに対して、時空間を個別に所有できるのが活字の良さ。そして自分だけのファンタジー空間を広げることができるのが活字の良さです。（中略）これらを共有したのが、原作のある物語の映画化ということになるのだけど。そういう意味で映画化にはいい面と悪い面と両方ありますよね」と述べている。さらに山中は、シリーズ第1作の『ハリー・ポッターと賢者の石』の映画化について、「何が良かったかと言ったら、イギリスの古い伝統的な部分ですよ。それがちゃんと生きていた、とくに建物。イギリスのオックスフォードとかやグロスターのクライストチャーチ大聖堂を使うとか、アニック城などのお城を使うとかね。ああいう雰囲気がいギリスの持っている良さです。ヨーロッパの持っている古さというか、伝統というか、その上に立脚しているということが明らかでしょう」と語り、インタビュアーの「そうですね、小説より良かったかも……」という発言に対して、「いみじくも現代女性である、日本の女性であるあなたが、『小説より良かった』と言われるのはなぜか？そっちの謎解きをするのが簡単ですよ。あなたは『ハリー・ポッター』シリーズを読んで、あのイギリスの背景をそのまま心に描くことができているからですよ」とコメントし、さらに「言外のイメージは、映画で見たほうがくみ取りやすいということでしょうか？」とのインタビュアーの質問に対し、「そういうことです。だから、あなたが『小説よりも良かった』と言われるのは、とてもよくわかる。今の日本の子どもたちが『ハリー・ポッター』シリーズの小説を読んで、映画で表現されているああいう深みを、最初から察知していたかということ、なかなかそうはいかない」と明確に答えている（山中、2002）。

ここで、山中が導出した論点は非常に参考となる。つまり、架空のファンタジーの世界であっても、単に読者が自由気儘にイメージを広げて、ファンタジーの世界にひたることが出来れば十分という訳ではなく、たとえば『ハリー・ポッター』シリーズであれば、イギリスという社会の持っている伝統や雰囲気を感じ取り、味わうということを十分に伴ってこそ、作品の持っている良さを十分に体験できるのだ、という指摘を山中は行っているのである。そして、今回筆者が目指しているのは、ファンタジーの世界を味わうことではなく、過去の子どもの生活や心理や人間関係を当時の雰囲気に即して受講者にもイメージしてもらいたい、ということなのであり、まさに「言外のイメージをくみ取って」もらうということに該当するのだから、「昔の子どもの様子や当時の社会の雰囲気」を活字による描写から読み取り、若い受講者達に生き生きとイメージしてもらうことが可能なのかどうかを考えると、それはかなり難しいことのように思われる。むしろ提示する作品として、映像メディアである映画を選択し具体的に見てもらう形にする方が伝わりやすい、と考えるのが妥当であるように思われる。

2) 演劇との比較

次に、演劇についてはどうか。先に引用した河合（1985）の演劇に関する発言は、有名な演出家スタニラフスキイの著作で我が国でも広く読まれた『俳優修業』を下敷きにしているものと思われる。河合はある著書で『俳優修業』を紹介しており、その中で、実際に大学の非常勤講師として演出家の竹内敏晴を招く機会があり、非常に大きな収穫があったと述べている（河合、1994）。確かに生の演劇を鑑賞することは、今まさにそこで行われている役者たちの演技と観衆との間で生起する相互作用を含んだ独自の良さがあり、記録された画像と音が再生される映画の鑑賞とはまた違った体験を観衆に与えられる利点がある。しかし残念ながら、演劇関係者を大学に招聘するといった試みを行う意義はわかっている、人材面、予算面などを現実的に検討すれば、いつでも、どこでも容易に実行出来るものではない。その点、大学の講義室にはプロジェクターや大型スクリーンなど映画を上映するための設備が整えられており、映画を教材として用いることは比較的容易である。また山中（2002）は、「映画とか舞台には総合芸術の良さがあります。これは時空間を完全に共有できるということです。その二時間ちょっとの間、見ている人が全員、共通して同じ体験をできるやん。これは映画や舞台という総合芸術が持っている良さですよ。総合芸術というのは、もちろんとくに視覚と聴覚の総合という意味ですけど。要するに五感を同時に刺激するもの。匂いとか味とかはまだ伴ってなくても、そのうちに実現されるでしょう。体感というものもあるよね。大きい劇場だと、ドドドドッとくるでしょう。体感まで感じられるくらいのイメージを与えられるわけです」と語っており、いわゆる総合芸術としての映画の良さと演劇の良さには共通する要素があると指摘しており、映画を選んだとしても演劇の要素を完全に排除したことにはならないのではないか。

3) 音楽との比較

音楽についてはどうだろうか。そもそも表現メディアとしての特性上、音楽は聴く者の感覚に訴えかけ、感情を喚起させることに向いていると思われるが、「特定の時代の子どもの生活や心理」などについて、音楽という要素のみで具体的に説明することは非常に難しいように思われる。たとえば歌曲や歌劇、あるいは舞台音楽、映画のサウンドトラックなどのように、何らかのテキストや視覚表現などと共に用いられることで、音楽はその特性を生かし、効果を発揮するように思われる。要するに、演劇と同様、映画を採用したとしても、それは音楽を排除するのではなく、同時に音楽的な要素を生かすことにもなるのではなかろうか。

以上、児童文学、演劇、音楽との比較検討を行ったが、その結論として、筆者の狙いには映画を用いることが適当であるということが導き出された。以下では、さらに映画独自のよさについてももう少し検討しておきたい。

4) 映画のよさについて

河合（2007）は、「映画を見るときに絶対お勧めしたいのは、『映画館へ行ってください』ということです。映画はおもしろいから、ビデオを借りてきて茶の間で見ようか、ではやはりだめなのです。茶の間で見ると画面が小さいので、映画の世界へなかなか入りにくい。映画館へ行って、自分は観客で、大画面の中にすごいがあると、すぐにその世界に自分が入っていただけます。鑑賞しているのではなくて、自分が入って体験しないと、芸術というのは意味がないと、私は思っています。映画館へ行って見ていると、音もそうですし、すべてのものの中に引き込まれていきます」と語っている。これは先の山中（2002）の発言とも非常に近いニュアンスが含まれているが、授業で「受講生全員が大きな画面で映画を鑑賞する」ということは、体験様式の面からも、感覚や感情をより強く動かされるという効果が期待される。これも映画を用いる場合の利点と考えてよいだろう。

さらに河合（2007）は「映画は映像で迫ってくるからやはり印象が強いです。私はいま、言葉で言っていますが、映画を二時間見ていると、『そうだな』とか、『やっぱり、うちの家でも考えないとだめだな』とか、教師なら『自分も、生徒に接するときに考え直さないと』ということが実感として湧き出してくる。これが強いところだと思います。だから、実際に臨床心理学の勉強をしている大学院では、みんなで映画鑑賞をしたり、そういうことをもっとやるべきではないか。映画を見て、本当にどう感じたのか、どう思うのかということを、話し合ったほうがいいのではないかと思うぐらいです」と述べ、臨床心理学教育で映画を活用するアイデアを語っているが、実は筆者も以前から授業の中で映画を教材に用いている。たとえば『男が女を愛する時』（米・1994年公開、監督：ルイス・マンドーキ、出演：アンディ・ガルシア、メグ・ライアン他）というキッチンシンカーを題材とする映画を途中まで受講生に観てもらい、「主人公一家の抱える問題は何か?」「この一家の長女にも心理的支援を行うのであれば、具体的にどのような支援の仕方が考えられるか?」といった課題に各自取り組んでもらうといった形の授業を行ってきた。これはいわゆるケースの「見立て」の作業を、映画の主人公一家の描写を元に行ってもらおうという試みであるが、やはり大きな映像を見ながら登場人物の心情や人間関係などについて感じ考える、という体験は受講者にとって強い印象を与えるようである。映画を鑑賞した受講生たちの多くは、登場人物の中の誰かに自然に感情移入を行い、あるいは「この後、この家族はどうなるか気になってしまって、レンタル店で探して続きをぜひ見たいです」と言う人も少なくなかったという経験を紹介しておきたい。

そして今回筆者は、河合が提案したように、映画の鑑賞を臨床心理士養成の授業の中に取り入れる際に、河合の指摘した芸術が臨床家に与える二つの要素についても授業の中に盛り込むことを検討したい。その際、観衆の共感性に訴えかける要素を重視するか、あるいは作品の表現を通して人間共通の『X』に触れ、見る者の根底が揺さぶられるような体験を重視するのかということを予め検討し、それに沿って取り上げる映画を選定し、また見終わった後、どのような課題について感想を求めたり、話し合ってもらうかについても事前に考えて準備する必要がある。またその際、前田（1999）が「うまく映画を見て楽しめる人は、いい面接者になれると、私は思っている。なぜなら、人の心のヒダを読み取るのに、映画はどすぐれた教材はないからである。映画でさまざまな感情を味わう、同時にその映像の象徴的な意味をあれこれと解釈してみる、さらに映像から触発されてくる記憶や今の自分の姿と、主人公の体験とを重ね合わせる、そしてそれらを総合して作品の主題を深く理解する……こうした映画鑑賞における対象と自分との間のイメージの運動というのは、まさしく心理面接での体験と共通したものである」と述べていることも大いに参考としたい。ここで前田が示しているように、映画の鑑賞を通して見る者の心理過程を丁寧に追いかけてながら臨床家としてのコミットメントと共通した要素を拾い上げていく、というのも臨床心理士の養成において映画を用いる際の演習課題の一例として適当なものとなるであろう。

3. 映画『コクリコ坂から』を題材とした大学院授業の実践の試み

本項では、今まで紹介してきた河合を初めとした臨床家たちの指摘を参照し、実際に授業内で映画鑑賞を行った試みを紹介する。そして受講者たちの感想から、過去の時代を描いた作品を通して、その当時の社会状況に即してかつての子ども像に触れ、現代の子どもとの違いを感情レベルでも実感し、それを踏まえて「今の時代を子どもがどのように生きていくのか」について考えるきっかけとなり得たかどうかを検討する。さらにこうした試みが、受講生にどの程度登場人物たちへの共感を喚起したり、作品へのコミットメントを通して河合の言う『X』に呼応する体験を生じさせたのかについても検討したい。また、前田の論点を参考に、受講者がどの程度臨床家としての心理面接と共通した心理過程を体験したのか否かについても加味してみたい。

(1) 鑑賞する作品の選定

今回鑑賞する作品として、映画『コクリコ坂から』を選定した。本作は2011年夏に公開されたスタジオジブリ製作による長編アニメーション作品である。原作は1980年に講談社「なかよし」誌上に連載された少女マンガ（原作：佐山哲郎，作画：高橋千鶴）である。30年以上前の少女マンガがスタジオジブリによって映画化された経緯については以下のようなエピソードが知られている。宮崎駿が映画製作後の精神的な疲労を抱えて夏を山荘で過ごしていた折り、姪たちが残っていた少女マンガ雑誌をつれづれに読んだ際、この作品に対し「少年も少女も断固としていて、軟弱でないのも気持ちよい」と惹かれるものを感じ、「ずっと昔の、恋に恋したころの胸迫る想いまでが、急によみがえってきたりする始末。何やら心がシンプルになっていき、木々の緑や繁り放題の庭の草に、新鮮な感動をうけるような、おどろくほどの変化が現れたのである。笑われても仕方がないのだが、神経症気味の自分には、明らかに『コクリコ坂から』がリハビリのきっかけになった」（宮崎駿，1991）。そして山荘に集まった知己のクリエイターたちと「この作品を映画化できないか」と検討し始めたが、「少女コミックというのは、ほとんど登場人物の心象風景によってひとつの世界を構築していて、それをそのまま映画にするとすっぺらになってしまうんです。多くの作品が自分らの世界に関心のない様々な要素、例えば、親とか、経済とか、政治とかを、ある種の傲慢さでもって排除してしまっているから、映画化してもうまくいったものはない」（宮崎駿，1995）ということがネックとなり映画化は見送られた。だがその後も宮崎駿は長年にわたってこの作品の映画化の構想を暖めており、上記の問題点についても「当時の舞台をきちんと再現しよう。その上で、そこに生きている人たちがどんな人間なのか、というのがお客さんに対して最も説得力がある」（鈴木敏夫，2011a）という着想から、時代設定を東京オリンピック開催の前年である1963年に変更し、宮崎駿自ら執筆に当たり（丹羽圭子と共同）、「原作の基本的な設定やストーリーラインを踏襲しながらも、大胆に翻案を施している。舞台は1963年の横浜。そこで描かれるのは、太平洋戦争終結から18年を経て、焼け跡から奇跡の復活を遂げた高度経済成長の只中にあった日本の、とある港町で営まれる、『どこにでもあった普通の生活』（Kosuke Ide, 2011）が闊達に描かれた脚本が完成する。監督には宮崎駿の長男である宮崎吾朗が起用され、最終的な興行収入は44億6千万円と同年の邦画のトップを飾り、同年の日本アカデミー賞最優秀アニメーション賞を受賞し、興行的にも作品内容としても一定の評価を得た作品である（宮崎吾朗，2013）。以下に映画のあらすじを紹介する。

港の見える丘にある、「コクリコ荘」という下宿屋を切り盛りする16歳の少女、松崎海^{うみ}は毎朝、海に向かって信号旗を掲げる。その旗の意味するものは「安全な航海を祈る」。彼女は父を海で亡くしている。そして、その旗を通学中のタグボートからいつも見上げていた1歳上の少年－風間俊は海と同じ高校に通っている。その頃、彼らの高校では、小さな紛争が起きていた。明治期に建てられた由緒ある文化部部室の建物、通称「カルチュラタン」の破壊と保存をめぐる、取り壊し推進派と反対派の対立である。生徒や教師を巻き込んで騒動が広がる中、「建物を守ろう」と生徒たちに訴えかける俊と海が出会う。俊の強い思いに共感を抱いた海は、そこで過ごした学生たちの思い出の詰まった、しかし古めかし^{すず}く煤けたカルチュラタンの価値を多くの人に理解してもらうために、建物内の「大掃除」をしよう、と提案する……。 (中略) 仲間たちと助け合い、共に運動に深くかかわる中で、海と俊は互いに惹かれ合っていく。しかしある陽、彼らの間に、その出生に関わる大きな問題が発覚してしまう。思いもかけない衝撃の知らせを受けて、戸惑い、苦悩するふたり。それでも、現実から目を逸らさずに生きる海と俊は、その苦しみを乗り越えていこうとする。そして、やがて戦争と戦後の混乱期に自分たちの両親がどのように出会ったのか、どのように愛し合ったのかを知る……。 (Kosuke Ide, 2011)

なお、本作を授業で取り上げることにした理由を以下に列挙しておく。

1) 時代設定が適切であること

作品の舞台は今から50年前、1963年の横浜である。翌年の東京オリンピックの開催に備え首都圏を中心にインフラの整備が急激に進み、現在の東京の街並みはこの頃に整備された状態が基本となっている。当時は高度経済成長のまっただ中で、庶民の暮らしは今日に比べれば慎ましいものであったが、皆が「明日は今日よりきっとよい日になる。将来にはもっと豊かな生活がある」という希望を持つことの出来た時代である。共同体における人と人とのつながりも今より濃厚であり、時に煩わしさを感じつつも、その中での守りや支えがまだごく当たり前機能していた。また「60年代というのは明治維新から現代に至る時間の中で、庶民の暮らしが一番劇的に変化した時代なんです。それまでは明治大正から受け継がれてきた暮らしを続けていたんだけど、60年代を起点にして日本は経済大国への道を邁進し始める、庶民のライフスタイルも現代に繋がる流れに大きく転換することになる」(鈴木敏夫, 2011b) という意味では、この時代は、現代から振り返る際に「古すぎて生活感覚が全く理解できない」ということを回避できる境界ギリギリの線上にあると言えるだろう。

2) 当時の様子が比較的正確に描写されていること

先にも述べたが、この映画は当時の舞台をきちんと再現した上で、そこに生きている人たちがどんな人間なのかを描くことを目指している。実際作中では50年前当時の人々の暮らしや人間関係、街の様子などが具体的かつ正確に、また非常に丁寧に描かれている。よって山中(2002)の指摘するように、当時の雰囲気を受講者がイメージするのを助けると期待できる。また登場人物たちの人間関係や心理がしっかりと表現されていて、筆書の狙いである「当時の子どもの姿を具体的に生き生きとイメージする」ということにも合致している。

3) 過去に作られたのではなく、現代から過去を振り返った作品であること

本作は50年前を舞台としているが、製作されたのは現代(2011年)であり、「50年前の人々や社会をいかに描き、そこから現代を考えるか」という作者たちの意図や吟味や工夫が働いている。そのため、たとえば今から50年前に製作された映画をそのまま上映した場合よりも、結果的に受講者にとって理解しやすいように思われる。今から50年前に生きていた人や社会の関心は、現代のそれとはかなり異なっていて、50年前の映画はあくまで当時の観客の興味に沿って作られている。そのため当時の社会情勢や人心の傾向などに関する知識が伴わない場合、現代の若者が観ても作品がよく理解できなかったり、誤解してしまう危険があることを本作では回避できる。

4) アニメーション映画であることのメリットが期待できること

本作はスタジオジブリ製作のアニメーション映画である。スタジオジブリの作品は若い受講者にとって人気があり、親しみやすい印象を与えることが期待できる。また本作はアニメーション映画であっても、現実の50年前の日本社会を舞台に、現実からの飛躍や誇張は抑えられていることも好ましい。

5) 主に登場人物の心理過程への共感を磨くのに適切な作品であること

登場人物の心理について、不自然さのない、一貫して落ち着いた描写に徹している本作品の鑑賞では、登場人物への共感が中心になると思われる。登場人物たちの心の動きや、またそれがどのような行動となって物語が展開するのかに受講者の関心が向かい、人と人との関わりを描いたシーンが受講者の印象に強くものと予想される。その一方で、人間共通の『X』に触れるという体験を強く喚起するような性質の作品では必ずしもはないと思われる(スタジオジブリの作品で、『X』に触れる体験と結びつきやすい作品を挙げるとすれば、宮崎駿監督作品の『もののけ姫』であり、同じく『千と千尋の神隠し』などであろう)。ただし、本作で描かれる『恋愛』や『思春期』という体験は、自分を根底から揺さぶられる体験であるため、作品や登場人物に深くコミットメントを行うことが出来れば、河合の指摘する『X』と触れ合う体験も生じる場合があるかもしれない。

(2) 授業における映画鑑賞の概要

2013年度の大学院授業「学校精神保健学研究」の第12回・第13回に、「子どものころを作品から読み解く」というテーマで映画『コクリコ坂から』を2回に分けて上映した。まず最初に、鑑賞に臨む態度として「登場人物に感情移入してみる」よう促し、さらに「登場人物に自分を重ね合わせてみる」よう試みながら、最終的には「作品のテーマを自分なりに理解する」ことに取り組んで欲しいと伝えた。また「今から50年前の高校生が主人公だが、当時製作されたのではなく、つい最近作られたものである。映画を最後まで見終わった時、『50年前の思春期像をあえて今、作り手たちは描いたのかを自分なりに考えてみて欲しい』という授業の趣旨も伝えた。

なお、前述の通り映画は2回に分けて上映したが、前半は冒頭から開始64分(Dパート・カット853)までを上映し、その後、1) 時代背景はわかりやすかったか、2) 映画の舞台設定やストーリーはわかりやすかったか、3) 登場人物の設定や人間関係についてわかりやすかったか、4) 登場人物への程度感情移入できたか、について4件法でセルフチェックを行ってもらい、また「登場人物への会場移入のしやすさ・しにくさ」および、

「映画の描写の中でよくわからないと感じた点」について自由記述を行ってもらった。後半は前回の続きから最後までを上映し、その後、1) 映画を見終わっての率直な感想、2) 映画の中で最も印象に残っているシーン、3) 50年前の高校生と、現代の高校生との違いと共通点について、4) この映画のテーマは何だと思うか、について自由記述を行ってもらった。最後に、この映画の製作背景や時代性についての若干の解説を行った。

以下では、大学院授業で映画を用いることの意義や課題について、受講生の感想を参照しつつ検討したい。

(3) 作品前半の鑑賞修了後の感想から

1) 時代背景はわかりやすかったか

受講生58名中、「とてもわかりやすい」が15名(24.1%)、「ややわかりやすい」が26名(44.3%)、「ややわかりにくい」が15名(25.4%)、「とてもわかりにくい」が2名(3.5%)という結果だった。「とてもわかりやすい」と「ややわかりやすい」を加えた受講生の約7割はこの映画の時代背景を「わかりやすい」と感じ、残り約3割の受講生はこの映画を「わかりにくい」と感じたようである。確かに、当時の様子を知る者にとっては郷愁を誘われるような表現も、受講生の多くを占めるストレートマスターにとっては、よくわからない、古くさい感じに映ってしまった可能性があるかもしれない。自由記述を見ると「いろいろな物などでわからないことがあった」「現代ではあまりなじみのない単語が少し分かりづかった」「時代背景や当時の出来事の知識がほとんどないため、うまく理解できなかった」といった率直な感想が見られた。具体的な点では、『まかない付きの下宿』という居住形態を知らないため「主人公の家になぜ家族ではない人たちが一緒に住んでいるのか、よくわからなかった」という疑問を9名が挙げていた。若い受講者の多くは学生向けのワンルームマンションで独居しているか、大学内の学生寮に居住していると思われるが、以前であれば個人や民間の経営する『まかない付きの下宿』で大学生活を送る者が多かったのを知る者は少ないようであり、これは筆者にとってはかなり意外であった。他には『ガリを切る』という意味がわからなかった」という記載も2名で見られた。このように映画の時代背景がややわかりにくいという感想があったことに対し、映画に出てくる用語や事物、人名についての簡単な解説を独自に作成して上映終了後に配布し、わからないことがそのままにならないように配慮した。

なお、本授業の狙いであった50年前と現代の若者との間の気持ちの違いについて言及したものはごく少数の3名のみであったが、受講生が感じた印象が率直に述べられており非常に参考になった。たとえば「カルチュラタンの住人たちが民主主義や哲学を熱く語っている意識や時代背景がよくわからない」「時代背景が変化することで、同じ年齢の人物を描いた作品でも考え方や行動にずいぶん差があるのはなぜなのだろうと思った。今の時代と文化や学問に対しての探求心、自立心等に考え方の違いはあるのだろうか。あるとしたら時代の違いだけなのか、他にもあるのか気になった」とか、「現代とは違う環境にいる子どもが何を考え、何を求めて生きたのかということがよくわからない。現代では自己愛が肥大して自分の快樂ばかりを求めている」といった記述である。これらの記述からは、少なくとも時代が違えば、当時の若者たちの考え方や行動は現代とはかなり異なっていることに気づいていることがわかる。ただし、それがどのような違いなのか、あるいはそうした違いの背景についてまで推論するのは難しかったようだ。ともあれ、このような問題意識が醸成されたことは非常に好ましい。

今後同様の実践を試みる場合は「時代背景による子どもの考え方や行動の違い」について感想を求めた上で、過去の子どもたちは具体的にどのような考えや行動をとっていたのか、あるいはそのようであったのはどのような時代背景によるのかについて解説を行うといった工夫をすべきであろう。

2) 映画の舞台設定やストーリーはわかりやすかったか

受講生58名中、「とてもわかりやすい」が18名(31.3%)、「ややわかりやすい」が27名(46.6%)、「ややわかりにくい」が10名(17.2%)、「とてもわかりにくい」が3名(5.2%)という結果だった。「とてもわかりやすい」と「ややわかりやすい」を加えると、約3/4の受講生がこの映画の時代背景を「わかりやすい」と感じ、残り約1/4の受講生はこの映画を「わかりにくい」と感じたことがわかる。この映画の舞台は下宿屋をしている主人公の高校生の自宅と、高校が主な舞台となっている。ストーリーも主人公と同じ高校に通う生徒との恋の行方を主軸に展開しており、特にわかりにくいという反応はなかったようである。

一方、学園紛争というストーリーのもう一方の軸については、「よくわからない」という反応が自由記述で多かった。たとえば、「そもそもカルチュラタンの存続意義とか、存続運動をしている理由がよくわからない」(9名)、「俊がカルチュラタンの屋根から飛び降りて『伝統に則って抗議』とあったが、どういうことかよくわからない」(5名)、「学生がやたらと集会を開いて議論していたが、それが何になるのかよくわからない」(5名)といった記述が目立った。宮崎駿(2011)は本作に関し、「学園闘争はノスタルジーの中に溶け込んでいる。ちょっと昔の物語として作ることができる」と語っているが、今回の受講生の反応を見る限り、学園紛争の記憶は今

日あまりにも風化し、当時の雰囲気を感じていない学生は全く知らないため、そこで繰り返される騒動は、「古くさい」とか「時代おくれ」といった嫌悪を誘うのではなく、一種異様で理解不能といったニュアンスを伴った疑問や、あるいは「政治をつよく感じてこわかったです」という率直な反応に繋がったようである。また「生徒が一致団結するシーンで、一体感はある程度あった方がいいと思いますが、いきすぎると個性や個人の自由がなくなってしまうのではないかと感じました」「学生の持つ思想的なものが、時代の風潮にあっているかどうかがよくわからなかった。どの学生も皆同じ考えではなかったと思うが、自分なら居場所を見つけられず困るかもしれないと感じた」という意見からも、当時と現代の若者の意識や感覚の違いが浮き彫りになったようで興味深い。

3) 登場人物の設定や人間関係についてわかりやすかったか

受講生58名中、「とてもわかりやすい」が19名(32.8%),「ややわかりやすい」が26名(44.3%),「ややわかりにくい」が11名(18.4%),「とてもわかりにくい」が2名(3.4%)であり、「とてもわかりやすい」と「ややわかりやすい」を加えると、「舞台設定やストーリー」とほぼ同じく、約3/4の受講生がこの映画の時代背景を「わかりやすい」と感じ、残り約1/4の受講生はこの映画を「わかりにくい」と感じたという結果であった。

自由記述においては、時代背景の項で紹介したと重なるが「主人公の家になぜ家族ではない人たちが一緒に住んでいるのか、よくわからなかった」という疑問を呈したものが9名あった。確かに家族でもない者がどうして主人公の自宅にいて、どういう関係なのか理解できないまま映画を観ているのは釈然としなかったであろう。次に「どうして主人公の母親は登場しないのか」という疑問が4名から挙げられていた。確かに映画の前半で母親は不在なのにその理由は明示されないのが当然の疑問である(なお、後半で主人公の母は登場し、不在の理由も明示される)。また、「主人公が主に家事全般を任されていたことに違和感を感じた」という疑問が4名から出されていた。これは、当時は子どもが家の手伝いをするのは当たり前であり、また母が不在ということもあり主人公が家事をこなす比重が高くなっていたようだが、劇中の台詞では夕食の当番は妹も交代で分担していることが示唆されたり、下宿人たちも料理や配膳を手伝っている様子は描かれているので、特に主人公は家事を押しつけられていた訳ではない。また作品で描かれた主人公海海の人物像は「押しつけられて嫌々家事をやっている」とか「不満だがそれを出せずに我慢している」というものではないと思われる。

また「主人公の名前は海の筈なのに周りからメルと呼ばれているのはなぜか」という記述も2名あった。「海」はフランス語でLa Merであることにちなんだ渾名が「メル」であると原作マンガでは説明されているのだが、映画では特に説明されておらず、疑問に感じてたのだろう。実はこの映画には字幕やナレーション、登場人物による説明的な台詞といったものが全く入らないため、いくら作品への予備知識がないと少々分かりづらい面があるということが、これらの受講生の指摘からも伺えた。

4) 登場人物へどの程度感情移入できたか

受講生58人中、「しっかりできた」が9名(15.5%),「少しできた」が44名(75.4%),「あまりできなかった」が5名(8.6%),「全くできなかった」は0名(0.0%)という結果だった。「しっかりできた」と「少しできた」を加えると受講生の約9割は登場人物へ感情移入ができたということになり、「あまりできなかった」のは1割弱で、「全くできなかった」者はいなかった。

感情移入が「あまりできなかった」と答えた者の自由記述を見ると、「特に主人公の特異な境遇は自分の実体験とつながるところが少ないので感情移入しづらかった」「恋心については感情移入できたが、時代の考え方が今と違いすぎて感情移入しにくい」「学生運動のような時代への積極的な関心は今の時代の学生としては理解は出来ても共感できない」「登場人物の表情が、全体的に、あっさり淡々としていたり、主人公が好きになった相手と兄妹であったとわかって、次の日には何事もなかったようで、あまり感情移入できなかった」といった内容であった。これらを整理し、感情移入しづらかった理由を挙げれば、「好きになった相手と自分が実は異母兄妹だったという設定」「当時の高校生たちの学生運動への積極的な関心の描写」「登場人物の表情や感情のあっさり淡々としている描写」といった3点に集約されてくる。その3点により「自分の実体験とつながらない」「今の若者とは違う」と感じてしまい、感情移入しにくくなってしまったのではないだろうか。ただし、こうした傾向はこの項目について「あまりできなかった」と回答した者に留まらず、「少しできた」と回答した者の多くが、「自分の体験と共通する部分、自分と似ていると感じた部分には感情移入しやすかったが、そうでないところは感情移入するのが難しかった」と率直に述べているのが目立っていた。こうした点について記述がみられたのは、感情移入が「少しできた」と回答した44名のうち27名(61.3%)であり、受講生の多くが映画を観た際に、自分の体験と共通する部分、自分と似ていると感じた部分には感情移入し、そうでないところは感情移入しにくかったことが推測された。これは当然といえば当然ではあるが、それではあくまで受講者個人の「素」

のレベルでの反応であり、筆者が想定する臨床家としての共感（今田，2013）というレベルには達していないのではないだろうか。共感し、感情移入していく糸口として、自分と相手との共通点を見つけるとするのはごく当然としても、そこで留まっていたら素人と同じであり、自分と共通しない体験や感情に対しても、専門家として共感していく訓練の必要性を説明する際に、上記の受講者からの反応は有効なデータとなるかもしれない。

5) まとめ

1) 時代背景はわかりやすかったか、2) 映画の舞台設定やストーリーはわかりやすかったか、3) 登場人物の設定や人間関係についてわかりやすかったか、4) 登場人物への程度感情移入できたか、の4点につき、受講者の反応は、いずれも7割以上でポジティブな評価が行われていたが、自由記述を加味すると、いくつか具体的に当時のことについての知識が伴わないことで理解しにくい面が生じたり、現代と当時の若者の考え方や行動の違いを感じるものの、それがどのような性質の違いであるのか、その背景は何かまでは十分説明できなかったり、あるいは学園紛争のシーンから感じられる当時の高校生たちのある種の集団主義的な傾向に違和感や嫌悪感を感じるといったことが示されたように思われる。また、共感できていると答えた者は多かったが、それは自分と共通の体験や感情が存在する場合に限定しており、今後は自分と共通要素の少ない場合にも十分共感が働くための訓練が必要であることが示唆された。

(4) 作品後半の鑑賞修了後の感想から

1) 映画を見終わっての率直な感想

受講者からの自由記述の内容を元に、以下の8つの要素に分けて紹介しておく。

①作品を通して自分の感情についての言及

受講者の23名が、作品を通して自分の中にどのような感情が生じたのかについて記入していた。その内容は非常に多様であり、単純に集約はできないが、たとえば「面白かった」「楽しめた」「感動した」「いい話だった」「はかなさやさみしさといった雰囲気が感じられた」といった全体的な感想を述べている者があった。また「主人公海の丁寧な暮らしぶりに憧れる」「海も俊も真っすぐな人で、すごく潔いというか、分かりやすいというか、見ていてスッキリする感じがしました」「学生たちがいきいきしていてすごくいいなと思った」「学生たちが何を感じているのか、どのように考えているのかをもっと知りたかった」といった、登場人物たちへの好ましい印象を率直に語っている者も見られた。あるいは特定のシーンを挙げ、登場人物たちへの感情移入が高まったことにより「泣いてしまいました」「こころが揺さぶられた」「胸が一杯になる感じ」「ほっとした」「ぬくもりが伝わってくる」といった心情を吐露している者も少なくなかった。さらには「もどかしさが取れ、すがすがしい気持ち」「余韻が残って、自分の中でより美化されている気がします」「前半はメルと風間さんとの出会いにドキドキ、ワクワクしました。中盤ではカルチェラタンの修復と二人の心の揺れをととても感じて、ドギマギしたもどかしさがあり、後半ではメルの母親が登場したことによる安心感のようなものを感じました。メルが今までの気持ちをやっと表に出すことができ、母親に向かって“泣く”ということで、私自身、ホッとすることができました」といったように、映画の流れと自分の感情の流れが連動している様子を詳細に述べている例や、「自分が高校生の頃と重ね合わせた」「あんなに熱くなれる学生たちがうらやましい。私も何かと一生懸命にやらなければという思いがわいてきた」「人とのつながりの大切さを感じる映画だった。また、家族のあり方とか、家族ってなんだろう、ということを考えさせられた」など、映画が自己の内省へのきっかけになったと述べている例もあった。

このように、受講者の映画鑑賞後の率直な感想の自由記述の約4割で受講者自身の感情への言及がみられたことは、この映画に対する各自の感情移入がうまく行われていたことを示しているように思われる。

②映画の結末について

「主人公の海と俊が兄妹でなくてよかった」という、映画の結末がハッピーエンドだったことに言及していた受講者が18名にのぼった。これは、上映終了後すぐに感想を記述してもらったことも大きく影響していると思われるが、ストーリー展開に受講生たちが十分に興味を惹かれ、よい結末を迎えたことに感情移入出来ていたことを反映した結果であると思われる。それは、映画の結末について、「心がほんわりした気分になった」「救われた感じがした」「二人のほっとした顔にジーンとききました」「二人に幸せになってほしいと心から願っている」といった感情のこもった記述をしている者があったことから伺える。

③映画の舞台である50年前の雰囲気について

映画の舞台である50年前の雰囲気について、16名が言及していた。まず「現代と比較すると人間関係や学校的环境に何とも言えない絶妙さがある」「今とは遙かに物質的に貧しい時代でも、力強く生きている高校生達はずごいと思った」「高校生たちの先生や目上の人に対する話し方、立ち振る舞いにも時代を感じました」「“友情”“他

人を思いやる絆”を感じた。昔の人は今の人に比べると義理人情に厚かったのではないかと思う」「当時の世の中は、苦労も多かっただろうけれども、皆で頑張ろうという姿勢が伝わってきた」など、映画の描写を通して50年前と現代の高校生の姿を比較して感慨を覚えるという、今回の実践の狙いに沿った感想を述べている者が4名、また「時代設定をよく研究して描写がすばらしい」「昭和の雰囲気がとても伝わってきました」「当時の世界観が登場人物の言動などによって理解できたと思う」「50年前の日本は、今とはずいぶん違うんだなとも感じた」といった、作品を通して当時を知ることが出来たという者が4名、「古き良き時代」「ノスタルジーを感じた」といった郷愁を誘う雰囲気に言及している者が3名、「あの時代がうらやましいなと思った」「私もこんな時代に生まれてみたかったというふう感じた」「自分のこの時代の子どもたちのように純粋でありたいなと感じた」といった憧れを感じた者が3名、「戦後の混乱の中では、今ではありえないいろいろなことがあるのだなあ」「戦争について考えさせられるものであった」という、当時においても影を落としている戦争についての言及が2名から得られた。こうした反響が上映後の率直な感想の自由記述の1／4強で得られたことから、今回の実践の狙いの一つである「過去の子ども像を受講生にイメージさせる」という試みはある程度成功したと思われる。

④登場人物たちの心理について

主人公をはじめとした登場人物たちの心理に注目した記述が13名で見られた。たとえば主人公の「強さ、やさしさ」「しっかりした性格」「常に全力である姿」「揺れ動く心情」「傷つき」「最後お母さんに甘えられたこと」など心理面に注目した者が多かった。また高校生たちが「みな心理的に自立している」「自分の感情に素直で、それを他者に素直に表現していたので、観ていてうらやましくなった」「一生懸命努力している」といった意見もあった。あるいは「映画に出てくる大人がとても温かく、いいなと思った」「主人公の二人が素直に真っ直ぐに伸びているのは、多くの人のあたたかい感情やつながりを無意識に自然に感じながら育ったからかなと思った」「昭和らしい厳しさや上下関係等、きつく感じるところもありますが、人と人とのつながりの暖かさを感じました」といった、当時の人間関係の雰囲気を的確に捉えた記述もあった。さらには「主人公が旗をあげるという行動の意味が最初と最後では変わったように思う」「前半、主人公があまり感情を表に出さなかったのが、俊と関わるようになると赤面し、笑顔になり、時には怒りと感情が豊かになっていき、最後にはきらめく海面よりも目を輝かせ、生き生きとした表情で終わるという変化が印象的だった」といったように、映画の描写から主人公の心の動きを的確に読み取っていた者もあった。作品を通した登場人物の心理への注目は本実践の狙いの一つであり、個々の記述は映画の描写を正確に把握しているものがほとんどだった。今後は課題として特定の登場人物や場面における心理的な読み取りを行うなどの展開も可能で、より実践を有意義なものにするとと思われる。

⑤作品自体への批判を述べた感想について

今回の映画鑑賞に当たっては、「登場人物に感情移入して見る」よう指示していたが、見終わった直後の率直な感想として作品自体への批判を記入した者が9名あった。「率直な感想を書いて下さい」と教示されても、教員が選んだ映画に対して批判を書くことはある意味で勇気の要ることであり、また少数意見であっても、そこから今回の実践の問題点を考える上で重要な手がかりを得られるかもしれない。以下にその内容をまとめておく。

まず「ストーリー展開が早い。もっと主人公たちの心のやり取りを見たかった」といったストーリーのテンポに馴染めなかったという意見が3名から、また「好きになった男女が実は血がつながっていて…というのは韓流ドラマなどと同じ展開で、少し興ざめた」「ストーリーとしては、俊が澤村の子どもでもあった方が面白かったのではないか」といったストーリーの内容への批判が2名から、「作品の内容がシンプルで浅かったので印象が深いとは言えない」「この映画がどのようなメッセージ性を持った作品なのか、いまいちよくわかりませんでした。作品としては面白いとも、また見たいとも思いません」といった作品自体への低評価が2名から、「メルや風間のキャラクターが、アクがなさすぎるのも少し残念」という登場人物のキャラクター描写への不満が1名から出ていた。このような、映画に対する感想として、作品への批判を含めて語るということは、普段我々は割とよく行っていることであるが、今回の授業実践の狙いは「あくまで作品を通して登場人物に感情移入すること」であり、「50年前の若者の生きたイメージに触れて、現代の若者との違いを感じてみる」ということにあるので、残念ながらこうした反応は授業の主旨に沿ったものではない。今後はこうした試みの主旨に沿って記述するように徹底するか、あるいは逆に「批判を含んでもいいので、正直な感想も述べて下さい」といった質問項目を付加することで、受講者の課題への取り組みが「きれいごと」にならないような配慮も必要かもしれない。

他に「ところどころ単語がわからないところがあり、感情が入りづらい部分もあった」「時代背景や登場人物の関係性などよくわからない部分が残っている」といった、時代背景のわかりにくさを挙げていた者が2名あった。これについては、たとえば今後は上映前に時代背景や今日ではわかりにくい用語などを資料で補足し理解を

助けるなどの工夫をしたい。また「今回、初めて見て、最初の方が少し難しかったり、2回に分けて見たりしたので、改めてまた見たいなと思いました」という意見もあった。今回も連続して映画を見られるように調整を試みたが、他の授業との関係で叶わなかった。もし条件が整えば今後は最後まで見られるように努力したい。

⑥以前にこの映画を見た時との印象の違い

4名の受講者がこの作品を以前に見たことがあると記述していた。具体的には「今回の方がより大きな感動を覚えた」「以前は漠然とストーリーを追っていたが、今回は登場人物それぞれの思いを強く感じながら見ることができた」「主人公の父たち三人の親友関係や、50年前の文化などの背景が前よりも分かった気がした」「前に見た時は“ありきたりだな”と思ったけれど、今回は力強さを感じさせる映画だと思った」など、全員が前回より深く映画を味わったことが述べられていた。これは単に再見したために細かいことが理解出来たためではなく、「登場人物に感情移入して見る」という教示がよい作用をもたらしたのではないと思われる。

⑦音楽の印象について

4名が映画で使用された音楽についての印象を記述していた。具体的には「音楽は心地よく感じた」「音楽もよかった。歌も印象的だった」「エンディング曲の優しい感じの音楽に癒されて涙が出た」「音楽がとてもよかった。それぞれの場面の登場人物の心情や背景が、音楽でより深く感じられた」といった肯定的な内容で、筆者が先に言及したように、映画において音楽が果たす役割が受講者の感想からも示された。

⑧視覚的な印象について

「絵がきれい」「背景や絵がきれいで、街の風景や乗り物、船には圧倒された」「風の表現が一つのテーマだったのかなと思った」といった、画面から受ける視覚的な印象を3名が書いていた。本来アニメーション映画には、多くの受講者から視覚的な印象についての感想が寄せられも不思議はないのだが、意外に少なかった理由として、冒頭に「登場人物に感情移入して見るように」と指示したため、映画を視覚的に楽しむよりも、登場人物の心理を感じ取ることに注意が向けられたことがあるのかもしれない。特定の教示を与えることが、映画への自然な観賞態度とは違った見方に誘導してしまう弊害が、今回のこの結果から明らかにされた。今後こうした影響の有無を鑑賞後に尋ねたり、あるいは事前に注意喚起を行うような配慮が必要かもしれない。

2) 映画の中で最も印象に残っているシーン

映画の中で最も印象に残っているシーンとして挙げる者が特に多かったのは、「路面電車の停留所で、主人公の海が俊に好きだと告白するシーン」(12名)、「海が母に俊のことを聞き終わった後、大泣きをしながら母に抱きつくシーン」(12名)、「海が夢の中で亡くなった父親と再会するシーン」(7名)、「海と俊が、父の親友だった小野寺船長と出会うシーン」(5名)であった。これらの4つのシーンは、確かにストーリー上のポイントとなっていて観る者の感動を誘うシーンであるため、受講者の反響が集中したことはごく自然に理解出来る。

以下、2名が記載していたシーンが8つ、1名だけが記載していたシーンは14に及んでいた。それぞれ印象に残った理由の記述を読むと、そのシーンが各自にとって心に残った理由は十分理解できるものであり、多くのシーンが挙げられていたことは、この映画を一人一人が、それぞれ多様な視点で受け止め、楽しむことが出来ることの査証とみてよいだろう。なお今回は時間の関係で鑑賞後のディスカッションを行うことが出来なかったが、たとえば小グループに分かれて各自が「最も印象に残ったシーン」を紹介し合い、それぞれの視点を分かち合ってみるという課題を設定することも授業の目的に合致しており、適切であるように思われる。

3) 50年前の高校生と、現代の高校生との違いと共通点について

①違いについて

まず「何もかもが違いすぎる」「考え方が根本的に違うんだな一と感じた」「現代の高校生と比べると明らかに当たり前だが古いと思う」という率直な印象があった。具体的な50年前の高校生たちの特徴について述べていた内容については、「集団で一つの事をなしとげようとする団結力がある」(23名)が最も多く、「何事にも熱心、エネルギーやバイタリティが高い」(19名)がそれに次いでいた。以下、「伝統的な社会習慣がまだ残っている」(9名)、「自主的・主体的である」(9名)、「行動力がある」(8名)、「礼儀正しい、目上の人への敬意を払う」(8名)、「人と人との結びつきが強い」(8名)、「言葉遣いが違う」(8名)、「自分の考えをしっかりと持っている」(8名)、「自分の気持ちや意見を相手にはっきり伝える」(8名)、「嫌なことから目をそらさず立ち向かう」(7名)、「携帯・ネットなどの通信手段がなかった」(5名)、「社会への関心の強さ」(4名)、「将来への希望や理想を持っている」(4名)、「電化製品が少なく生活が不便だった」(4名)「子どもが家で手伝いなどの役割を持っている」(4名)、家族や学校以外での大人との関わりがある(4名)、「家族の結びつきが強い」(3名)、「戦争の影響がまだ身近にある」(3名)、「服装や歌などの流行の違い」(3名)と続いた。この結果から、当時の高

校生たちの「伝統的な社会習慣や大人への礼儀に一定の敬意を保ちつつ、社会情勢に強い関心を持ち、自分の考えをしっかりと持って、団結力を持って積極的に行動し、自分の意見を相手にはっきりと主張していた」という姿が、具体的かつ比較的正確に捉えられていると思われる。なお、今回は時間の関係でディスカッションの時間を取れなかったが、ここで挙げた課題について小グループに分かれてディスカッションし、「50年前の高校生のイメージをグループごとにまとめて発表する」といった形で展開しても効果を上げられると思われる。

②共通点について

50年前と今の高校生との間の共通点としては、「人の心」「人を想う気持ち」「心の底のやさしい思いを求めるところ」といったやや抽象的な記述もあったが、具体的には、「恋愛に関する気持ち」(32名)や、「家族愛」(10名)、「友人の大切さ」(10名)、「日頃の学校生活の様子」(8名)、「精一杯自分らしく振る舞おうとする姿勢」(8)、「受験や進路の悩み」(6名)、「思春期特有のエネルギーの強さ」(5名)、「現代でも条件が整えば団結力はある」(5名)、「アイデンティティをめぐる葛藤」(4名)といった記述がみられた。本作品は主人公の恋愛と思春期のエネルギーに満ちた学園生活を描くものであり、時代の変遷と共に表に現れる形は変わっても、その二つは本質的には変わらないということをこれらの受講者による記述は示しているようで、納得できるものだった。

4) この映画のテーマは何だと思うか

各自にこの映画のテーマを考えてもらった際、自由記述という形式を取ったこともあり、他の課題に比べても一層多種多様な意見が出され、特定のテーマに収束するというにはならなかったが、それも当然のことであろう。それでも、ある方向性は示していると思われるので、それぞれについて紹介しておきたい。

①主人公たちの心の動きや行動を通して、自分自身がどう生きるかを考えること

たとえば「自分のいる環境の中で、精一杯、自由に生きていくこと」「割りきれないものを共に生きていくこと」「一人では何もできない。思いを受け止めたり、受け取ったりして共に生きていく、ということ」といった、映画の中に何か作者が示した正解がありそれを読み取ることでテーマが理解できる、という姿勢ではなく、劇中で描かれた主人公たちの心の動きや行動を通して、自分自身がどう生きるのかを考えようという姿勢で記述されているものがこれに該当する。これは臨床実践において、ケースを理解する際に必要な姿勢に通じており、こうした姿勢でテーマを考えてくれた受講者が24名と多かったことは非常に好ましい結果であると感じている。

②映画に描かれた普遍的な概念について考えること

たとえば「恋愛」「家族」「人間愛」「人間同士のつながり」「青年期のアイデンティティの確立」「成長」「純粋さ」「さまざまな交錯」「未来に対する希望」といった、映画の中で表現されていた、ある種の普遍的な概念をテーマではないかと感じ、それについて指摘しているという記述がこれに該当する。こうした記述は23名で見られた。ここで挙げられた概念は、どれも映画のテーマなり得るような普遍的で重要な概念であるが、そうした概念について改まって考えようとしても、しばしば抽象的な思弁に陥りやすい。今回のように、映画という、具体的な登場人物やストーリーに沿って、またドラマ的な展開を通して、具体的に考えることで観る者にとって実感として人間の本質について考えることが可能になるのではないかとと思われる。これは、人間の心について考える時、あるいは心理的支援とはどうあるべきかを考える時、やはり抽象的な議論に終始するのではなく、実際の事例に基づいて検討することが大切であることに一脈通じているように感じられて大変興味深い。

③過去の日本の姿を知り現代について考える

たとえば「高度成長期の日本」「戦争と戦後日本の問題」「50年前の若者の日常を現代の人々にあえて伝える事で日本がどのように変化してきたか、今の日本にはなくて、昔の日本にあったものは何か、という事を伝える事」といった、この映画が過去の日本の姿を比較的忠実に描いていることに注目し、そこからさらに現代の日本や現代の若者について考えることを強調したものである。こうした記述は10名でみられた。確かにこうした点も今回の実践の狙いの一つであるが、それはあくまで人間の心について深く知る、ということが主旨であって、過度に社会批評的に掘り下げることに関心が移ってしまわないように注意が必要だろう。また、ともすれば過去をいたずらに賛美し、現代の風潮を嘆くといった傾向に結びつきやすいことへも注意が必要だと思われる。このことについては、たとえば「『ALWAYS 三丁目の夕陽』のような、東京五輪前夜へのノスタルジーの学生版、アニメ版なのではないだろうか。ただ、実際には様々な問題も多かった時代であり、そういったノスタルジーには危険な面もあると思う」「単純に『50年前の子どもたちはよかった、今はよくない』というのではなく、もっと活発であってほしい、という願いのようなものがテーマ」だといった指摘が受講生から寄せられていたのは頼もしい限りであった。なお、映画の製作に関わった宮崎駿(脚本)、宮崎吾朗(監督)の本作に関するインタビュー等をみる限り、彼らにはこの時代をノスタルジーの対象として礼賛するような態度はなく、むしろ批判的な視点を

持ってこの時代を描こうとしていたことがわかる（宮崎駿，2013／宮崎吾朗，2013）。

5) まとめ

1) 作品を見終わっての率直な感想，2) 映画の中で最も印象に残っているシーン，3) 50年前の高校生と，現代の高校生の違いと共通点について，4) この映画のテーマは何だと思うか，の4点につき，受講者の大半は十分に感情移入を伴って取り組み，表面的な理解に留まるのではなく，自分なりに感じ考えた上で多様な感想や意見を挙げていた。今後の課題として，感情移入を強調することにより，画面の美しさが感想に上がらない，あるいは作品への健全な批判を封じてしまう可能性など，受講生の自然な観賞態度を妨げる場合があることにどう適切に対処するかを考える必要がある。また，今回の受講生の感想の内容からは，映画を見終わった後のディスカッションを効果的に行うための多くの示唆が含まれていた。

4. おわりに

今回，授業の中で映画を鑑賞し，作品の中で描かれた50年前の高校生の姿を，受講生達の多くは生き生きとしたイメージを伴って受け止めることが出来たように思われる。当時の生活に関する知識を補足する資料を用意したり，感想としてどのような点に絞って述べてもらうか，あるいは今回実施できなかった小グループでのディスカッションを導入するなど，今回の反響を参考にさらにより実践となるよう工夫を行いたい。

引用文献

- Kosuke Ide『コクリコ坂から』解説②物語と解説．西田善太編 BRUTUS 特別編集スタジオジブリ マガジンハウス 2011 p16
- 今田雄三 セラピスト養成における現代的な問題とその対応－関係性が成立困難な時代に育った世代への指導を通して－．鳴門教育大学研究紀要 人文社会学編 28 2013 184－198
- 河合隼雄 カウンセリングの聴き方－技法の基礎にあるもの－．河合隼雄 カウンセリングを語る（上）．創元社．1985 pp47－91
- 河合隼雄 芸術家の修業に学ぶ．河合隼雄 ブックガイド心理療法 日本評論社 1993 pp173－184
- 河合隼雄 カウンセラーのための児童文学．河合隼雄 カウンセリングを考える [下]．創元社．1995 pp139－179．
- 河合隼雄 心理療法と芸術．四天王寺監修 四天王寺カウンセリング講座 創元社 2007 pp122－157
- 前田重治 本書を推薦します．山中康裕・橋本やよい・高月玲子編 シネマのなかの臨床心理学．有斐閣．1999
- ※そで（カバー折り返し部分）に推薦文として掲載された文章
- 宮崎吾朗 「父，自分，そしてこれから」．鈴木敏夫 鈴木敏夫のジブリ汗まみれ2 復刊ドットコム 2013 pp 171－190
- 宮崎駿 『コクリコ坂から』（高橋千鶴・作）／はくの少女マンガ体験．Comic Box 1991年1月号（宮崎駿 出版点 1979～1996 徳間書店 1996 pp275－286に再掲）
- 宮崎駿 PD インタビュー◆宮崎駿：近藤喜文監督が描く女性キャラクター零は決して人にこびない女の子なんです．アニメージュ 1995年3月号 p22（鈴木雅展編 ロマンアルバム『月刊アニメージュ』の特集記事で見えるスタジオジブリの軌跡 1984－2011 徳間書店 2011 p100に再掲）
- 宮崎駿・丹羽圭子 脚本コクリコ坂から．角川書店 2011
- 宮崎駿 「時代が僕に追いついた」「風立ちぬ」公開．日本経済新聞 2013年7月27日
<http://www.nikkei.com/article/DGXNZO57782960W3A720C1000000/?df=4>
- 鈴木敏夫 映画「コクリコ坂から」はこうして始まった。－鈴木敏夫プロデューサーによる製作報告会見。（2010年12月15日）より－ ニュータイプ編 コクリコ坂からビジュアルガイド～横浜恋物語～ 角川書店 2011a pp88－89
- 鈴木敏夫 『コクリコ坂から』を描いた人々 鈴木敏夫【プロデューサー】．荒井香織・五所光太郎・斎藤良一・鈴木隆詩・徳木吉春・三木茂・アニメージュ編集部構成・執筆 ロマンアルバムコクリコ坂から 徳間書店 2011b pp64－67
- 高橋千鶴・原作佐山哲郎 コクリコ坂から．角川書店 2010

滝川一廣 新しい思春期像と精神療法, 金剛出版 2004

山中康裕 千尋とハリー世代の子どもたち, 朝日出版社 2002

The attempt to empathetically understand the past image of adolescence through a movie

—— Introducing “From Up On Poppy Hill” as the subject of graduate courses ——

IMADA Yuzo

(Keywords : movie, adolescence, empathy, training of clinical psychotherapists, course practice)

The author dealt with the psychologies and activities of Japanese high school students 50 years ago through watching a movie in the graduate course of training clinical psychotherapists. Graduate students were asked for feedback in self-assessment forms and free descriptions if they could empathize with the movie characters. As a result, most students could understand empathically, although some details about the past daily lives were hard to comprehend. However, the empathy was tend to be difficult if they could not found common elements in their own experiences and feelings. It is necessary to train the students' capacity of adequate understanding if they have little in common with the situations.